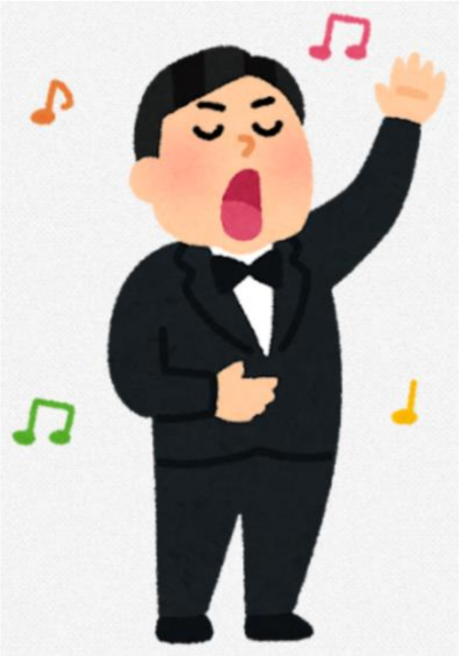
名古屋男声合唱団　団内誌

Agora

第 38 号



2026. 2. 1

◆ 第 38 号目次 ◆

新たな曲作りを目指して
Spring Concert 2026 プログラム原稿より

◆ジブリの森から

T1. 安田良宏 — 1 —

◆懐かしい歌たち — ハンス･アイスラー男声合唱作品から

T2. 松本茂生 — 2 —

付記：ハンス･アイスラー略歴と曲目解説は Agora 第 35 号 2025.9.21 参照

◆「白秋万華鏡」— 北原白秋の詩による男声合唱アンソロジー

T1. 高橋昭弘 — 3 —

付記：「白秋万華鏡」— 北原白秋の詩による男声合唱アンソロジー　理解のために
＜その 1＞は Agora 第 32 号 2025.1.28、＜その 2＞は Agora 第 33 号 2025.4.20、
＜その 3＞は第 34 号 2025.7.6、＜その 4＞は第 36 号 2025.10.5、＜その 5＞は第 37 号 2025. 10.19 参照

◆「白秋万華鏡」ナレーション原稿再改訂版

T1. 高橋昭弘ほか — 7 —

話題いろいろ

◆仏教よもやま話
第 2 回《高座》　第 3 回《観音様》

B2. 松田昌展 — 10 —

付記：第 1 回《お布施》は Agora 第 31 号 2024.9.15 参照。

◆ちゅうコン７７を終えて

B1. 西島忠治（写真撮影 T2. 小野幸義） — 11 —

新たな曲作りを目指して
Spring Concert 2026 プログラム原稿より

◆ジブリの森から
—子どもたちの未来が幸せでありますように・・・—

ジブリ映画の音楽には、どこか懐かしく、心の奥に響く“人の生き方”が息づいています。そこには、命の尊さ、自然への感謝、別れと出会い、そして未来への希望が静かに織りこまれています。これまでの人生で多くの出会いと別れを経験してきた私たちだからこそ、このステージでは、ただ懐かしさを歌うのではなく、「生きることの美しさ」や「人を思う心の力強さ」を伝えたいと願っています。ジブリの森に吹く風のように、やさしく、明るく、しかし深く。子どもたち、孫たち、そして未来を生きる若者たちへ、私たちの思いをこめて歌います。

○ひこうき雲

空へと伸びる一本のひこうき雲。その姿は、若くして命を燃やし尽くした人の軌跡を映しています。人生のはかなさと輝きを見つめながらも、どこかに希望を見出そうとするユーミンの詩。ジブリ映画『風立ちぬ』の中で流れるこの曲は、愛する人を思い、見送る切なさと、天へ昇るような清らかな祈りが共存しています。私たちは、この曲に、過ぎ去った日々を懐かしみながらも、今を生きる喜びを重ねて歌います。聴く人それぞれの心の中にも、大切な誰かの“ひこうき雲”が見えることでしょう。

○テルーの唄

『ゲド戦記』の中で、孤独な少女テルーが静かに歌うこの曲。谷山浩子の透明な旋律とともに、自分を信じる勇気と、心の奥に宿る光が描かれています。私たちにとっても、この曲は人生の晩年に寄り添うような静かな祈りの歌。誰の中にも、傷ついた心を抱えながら、それでもなお温もりを求めて生きている“テルー”がいます。男声の深い響きが、少女の孤独に寄りそい、やがてそれを包みこむように広がっていきます。人生の静かな強さを感じていただければ幸いです。

○となりのトトロ

誰もが笑顔になれるこの曲は、まさに日本の“心のふるさと”です。トトロの森には、子どもたちの夢と自然の優しさが満ちています。大人になっても心のどこかに残っている“無邪気な時代”を思い出させてくれる名曲。私たちはこの歌を通じて、純粋な心の大切さを再び感じたいと思います。年を重ねた今だからこそ、子どものようなまっすぐな笑顔で歌いたい。聴いてくださる皆さんと一緒に、あの森の風の中を、トトロととも

に歩く気持ちでお届けします。

○世界の約束

『ハウルの動く城』の主題歌として知られるこの曲は、別れと再生、そして“愛”の永遠を切々と語りかけます。谷川俊太郎の詩には、深い優しさと時間を超えたつながりが宿っています。失った人を悲しむのではなく、心の中に生き続ける存在として受け止める。そのような人生の知恵を、私たちはこの曲から学びました。木村弓の澄んだ旋律に、男声の温かなハーモニーを重ねて歌います。「世界の約束」とは、きっと“誰かを思う心”そのものなのかもしれません。

○　君をのせて

『天空の城ラピュタ』の主題歌として、多くの人に愛されるこの曲。印象的な旋律には、冒険と成長、そして未来への希望があふれています。この歌は、旅立つ子どもたち、孫たちへとエールを送るような歌でもあります。私たちは、自分たちの人生を重ねながら、次の世代に“生きる力”を託したい思いで歌います。男声合唱の厚みのある響きが、久石譲の壮大な音楽世界と重なり、天空へと広がるようにホールを包みます。どうか皆さんの心にも、未来へ羽ばたく風が届きますように。

このステージは、懐かしさにとどまらず、「生きることの意味」と「未来への祈り」をこめた旅でもあります。ジブリの森の中で、人の心のあたたかさを、どうぞ一緒に感じてください。

（安田良宏記）

◆懐かしい歌たち — ハンス･アイスラー男声合唱作品から

ハンス･アイスラーという作曲家をご存じでしょうか？おそらく日本ではあまり名前を聞かないでしょう。実はシェーンベルクの高弟として知られ、劇作家で有名なベルトルト･ブレヒト(以下ブレヒト)と組んで多くの作品を残し、また旧東ドイツ国歌を作曲、名前を冠した音楽大学があるなど、高名な作曲家です。

名大男声合唱団では 1986 年の第 32 回定期演奏会でこの作曲家を取り上げています。本日は過去演奏した４曲と、今回新たに楽譜をとり寄せ、団内で邦訳した１曲の計５曲をお届けします。いずれも骨太の曲ばかりです。興味を持っていただけたらこの上ない幸せです。

○マイクに贈る石炭

1930 年作曲。ブレヒトの詩。20 世紀の初めアメリカで鉄道員の未亡人に仲間の鉄道員たちが石炭を届けます。それは決して会社には見つかってはならないことであり、肺を病んで死んだ仲間に対するレクイエムなのです。

訳詞はハンス･アイスラー研究の第一人者であった故･岩淵達治氏。1986 年の定期演奏会の際、岩淵氏に多大な協力をいただいたことを思い出しました。

○凍死した兵士たち

1930 年作曲。作詩者のカール･クラウスはオーストリアの作家･ジャーナリスト。第 1 次大戦で死んだ幾多の兵士たちに思いを募らせて書いたこの詩は、戦争の理不尽さを伝えます。「この死は誰の仕業」と問いかける歌詞は現代の情勢にもつながります。

○農民の反乱

1928 年作曲。選曲作業の中で聞いたCDで「これは！」と興味を持ち、楽譜を取り寄せました。もちろん元詩はドイツ語。これを AI 翻訳とドイツ語に堪能な団員で邦訳を練り音に当てはめました。内容は 16 世紀マルティン･ルターに発する宗教改革によって起こった「ドイツ農民戦争」で歌ったものです。唯一農民側について戦った貴族、フロリアン･ガイヤーの物語です。戦争は農民側が鎮圧されガイヤーは最後敗走･刺殺されますが、その思いを継いだ者たちはまだ戦い続けます。

○子供の国歌

第二次大戦後、1950 年にブレヒトの詩に曲がつけられました。「よいドイツが花咲く　他の国と同じに！」敗戦で荒廃したドイツが立ち直っていく歌とも聞こえます。アイスラー自身が歌った音源が残されており、それは幾多の苦難を経験した好々爺が孫たちに語りかける優しい歌唱となっています。

○連帯の歌

1931 年作曲。作詩はブレヒト。ハンス･アイスラーの最も有名な曲の一つ。「立て、立ち上がれ　連帯こそ力」と歌われるこの曲は、スペイン市民戦争で義勇軍によって歌われ、各地･各国の権力に抗う人々を支援するプロテストソングとして広く歌われるようになりました。チリのフォークグループ、キラパジュン(Quilapayun)のアレンジを故･戸島美喜夫氏に編曲していただきました。スローテンポから始まり、打ちのめされた人々が立ち上がり、団結して前に進む様が見事に表現されています。

(松本茂生記)

◆「白秋万華鏡」―北原白秋の詩による男声合唱アンソロジー

○「柳河」

北原白秋は1885 年(明治 18 年)、現在の福岡県柳川市に酒造りの旧家の長男として生まれます。父親は商家の跡継ぎとして期待しますが、彼は幼少の頃から詩的世界に憧れる少年でした。白秋 16 歳

の時、北原家は大火により酒蔵と六千石の酒を失い、その後更に２度目の火災に見舞われ没落していきます。柳河の町もまた次第にかつての活気を失っていきます。『柳河風俗詩』所収「柳河」は、人も住まわぬ遊女屋の廃屋に、かつての華やかな水郷の町の幻影を見ます。

○「片恋」

19 歳で上京。24 歳、第一詩集『邪宗門』で詩壇にデビューしますが、その詩が余りにも耽美的で難解であったため、文壇では認められますが一般には知られることはありませんでした。

26 歳、第二詩集『思ひ出』によって、一躍若き才能ある詩人として認められることとなります。当時の詩人第一人者の上田敏や、大先輩として崇拝する永井荷風からも激賞され、文学雑誌『文章世界』の「文界十傑」という人気投票で、 詩人の部で一位を獲得します。二位が蒲原有明、三位は与謝野鉄幹、四位が三木露風という顔ぶれからみても、その人気のほどが分かります。

「片恋」は、詩集『思ひ出』所収。白秋自身が代表作として推しています。舞台は東京、墨田区の「曳舟川」。そのほとり私娼界隈の安宿か。「あかしやの金と赤とがちるぞえな」、ことばの華麗な美しさを追い求める詩風に、フランス象徴詩の影響が見られます。

こうして詩人として絶頂期を迎えた白秋でしたが、当時住んでいた千駄ヶ谷の隣家の人妻松下俊子と激しい恋に落ち、俊子の夫により当時刑法に定められていた「姦通罪」で訴えられ、市ヶ谷の東京監獄に収監されます。弟鐵雄の必死の金策により示談に持ち込み免訴となりますが、この事件は「芸術の寵児によるスキャンダラスな恋愛事件」として世間を賑わすこととなり、白秋は詩人としての地位をも一気に失うこととなります。

○「追分」「びいでびいで」

一時は自殺を考えるほど精神的に追い詰められていた白秋ですが、晴れて結婚した俊子を伴い、三浦半島の漁師町三崎に隠遁します。柳河から白秋を頼って上京してきた北原家一家も養わねばならず、経済的にも窮乏していました。

更に俊子が肺を患い、その転地療養と自身の再生のために、彼は小笠原諸島父島への移住という無謀な計画を決行します。東京から一千キロ、江戸時代末期までは無人島であったこの島での生活は困難を極め、３ヶ月後には俊子を帰しますが、白秋は一人ここで半年間暮らします。東京からはるか隔てられた「絶海の孤島」は白秋にとって「異郷」であるとともに「ユートピア」でもありました。白秋は身も心も洗われ、再生の道へと進む一筋の光を見いだします。

この小笠原での生活の思い出から生まれた詩２篇。

「追分」。椰子の花の咲く南の島。月夜に流れる尺八の音色が奏でるのは酷寒の地北海道の民謡「江差追分」。その劇的な対比が、望郷の思いを際立たせます。
「びいでびいで」。「びいでびいで」は、ムニンデイゴという小笠原固有種の木の小笠原方言名。その花の下での出会いと別れ。切ない初恋の思い出を歌います。びいでびいでの花を髪に飾る可憐な少女のモデルは、白秋が小笠原で出会ったリデアという少女なのかも知れません。

小笠原から戻った白秋夫婦は、当時麻布に転居していた白秋一家―両親、弟鐵雄、妹いえ、と同居することになります。一家６人鐵雄の定収入だけに頼る生活は困窮を極め、更に明治期の家父長制が厳然と生きている時代の中、家族関係も凍り付いていきます。そうした状況に遂に耐えきれず節子は家を出ていき、二人はその年離別します。

その２年後、白秋の前にもう一人の女性が現れます。平塚らいてうの『青鞜』で編集の手伝いをしている江口章子、自らも歌を詠む女性でした。二人は結婚、葛飾に八畳と六畳二間の小さな家を借ります。生活は相変わらず窮乏を極めますが、章子と苦楽をともにする中で、芸術の理想に生きる者は貧しさを受け入れなければならない、と筆一本で生きる覚悟を固めていきます。
田園の自然と毎日訪ねてくる子どもたちに癒やされる中、白秋は、子どもたちの内に「無垢」「純心」を発見し、新たな創造の核としての「童心主義」を構想していきます。

○「男声合唱とピアノのための赤い鳥小鳥―第１章：小さな命」より
揺籠のうた～栗鼠栗鼠子栗鼠～兎の電報～ちんちん千鳥～赤い鳥小鳥

大正７年、鈴木三重吉の主宰する『赤い鳥』創刊によって「童謡詩人」として再出発。その後『赤い鳥』を舞台に数々の童謡詩を発表していきます。
白秋は、新しい童謡詩を創造するにあたり、その根幹に日本の伝承童謡を据えるとし、全国に伝わるわらべうたを蒐集し『日本伝承童謡集成』(全３巻)をまとめます。更に、イギリスの伝承童謡である『マザーグース』を研究し、日本で最初の『マザーグース』日本語訳を出版します。白秋の童謡詩人としての再出発は、綿密に準備された満を持したものであったことが窺えるとともに、彼の創造した童謡詩は、明治期唱歌とは一線を画すものであり、新たな「子どもの発見」であると同時に、寓意、暗喩などをちりばめた大人にも楽しめる深さを持つ詩作品でした。

童謡詩人として認められた白秋は小田原に小さな家を建て引っ越しますが、章子との結婚生活は永続きせず４年で破綻します。その後、小田原の美術評論家河野夫妻から、九州出身の佐藤キクという家庭的な女性を紹介され３度目の結婚をします。翌大正11年には長男隆太郎が生まれ、父親となった白秋はいよいよ童謡詩に力を入れてゆきます。キクとの結婚生活は生涯続くこととなります。

○「からたちの花」「ペチカ」

童謡詩人として再起を果たした白秋は、その後山田耕筰と出会い二人のコンビにより数々の名作歌曲を生み出していきます。

「からたちの花」は、「からたちのそばで泣いたよ」の一節がとりわけ印象的ですが、この詩句について耕筰は「からたちのそばで泣いた少年は私だ」と語っています。

耕筰は子どもの頃父親を亡くします。苦学生のための施設「自営館」に寄宿し、印刷所で働きながら学校に通います。彼は『自伝』の中で当時の思い出を次のように語っています。「工場で職工に足蹴にされたりすると—活版職工は大体両手がふさがっているので、殴るより蹴る方が早かった—私はからたちの垣まで逃げだし、人に見せたくない涙をその根方に濯いだ。」と。

耕筰が白秋にこの思い出を語ると、白秋は感激して泣いたといいます。

「ペチカ」の舞台は、ロシアと思われがちですが、満州です。大正期、満州への移民が増加し、南満州教育委員会から愛唱歌を作ってほしいとの依頼を受けた二人が満州に出かけて作りました。雪に閉ざされた冬の夜、暖炉の傍で昔話を語る母と子の情景を歌います。1924 年『南満州唱歌集』に収められますが、1932 年に大改訂で削除されます。

当時の満州の政治情勢を概観すると、1931 年に満州事変、1932 年に傀儡国家満州国設立、1937 年盧溝橋事件を契機に日中戦争へと突入していく激動の時代でした。

編曲者の三善晃は 1933 年生まれ、終戦の年には 12 歳の少年でした。敗戦間際の夏、三善少年は友達と一緒に多摩川で泳いでいた。その時飛来した米軍機の機銃掃射により、すぐ横で泳いでいた友が撃たれて死ぬという体験をします。三善晃は、戦後もそのトラウマを心の奥に持ち続けた作曲家でした。その三善晃編曲による「ペチカ」は、雪の夜の幸せな母子を描く白秋の物語世界を、当時の歴史的時系列の中へと置き直すことによって、厳しい冬の時代の中で決して来ない春を待つ人々の物語へと変換しているように思われてなりません。

白秋は昭和 17 年(1942 年)57 歳で亡くなります。最晩年は糖尿病のため殆ど視力を失っていました。絶筆となったのは、水郷柳河写真集『水の構図』の序文。「水郷柳河こそは、我が生まれの里である。この水の柳河こそは、我が詩歌の母体である。」と書いた。

(高橋昭弘記)

追記：本ステージのナレーション原稿は、瓦版 170 号のp4～6(今後手直しの可能性あり)に掲載されています。

「瓦版170号(2026.1.11)掲載の改訂版」をその後短縮したものが以下に掲載した再改訂版です。堀崎さんの案が大幅な短縮版であったので、これをベースにして、いのこさん、稲守さん、堀崎さん、とメールで相談しながら、高橋さんが改訂版を作成しました。この再改訂版は、瓦版173号(2026.2.1発行)に掲載されているものと同じです。Agora第38号印刷時に間に合わなかったのでAgora第38号印刷版には掲載されていません。

○「白秋万華鏡」ナレーション原稿　堀崎改定案をベースに再改定案

〈ナレーション—１〉

このステージは「白秋万華鏡」と題して、北原白秋の生涯で生まれた詩に作曲された多彩で繊細な世界を歌います。

北原白秋は、近代日本がスタートして間もない明治18年、福岡県柳川市の造り酒屋に長男として生まれます。家の跡継ぎと期待された白秋ですが、詩的世界に憧れる少年でした。16歳の時、北原家が大火にあった時にも焼け跡から愛読していた島崎藤村の『若菜集』を見つけ、涙をすするほどでした。その後また火災に見舞われ北原家は没落、城下町柳川も近代化の波に洗われ、衰退します。

19歳で上京、詩人への道を歩み始め、24歳、詩集『邪宗門』でデビューしますが、あまりにも耽美的で難しく、一般にはあまり知られませんでした。

若き才能ある詩人として認められたのは、2年後に発表した詩集『思ひ出』によってでした。崇拝する永井荷風から激賞され、文芸誌の人気投票･詩人の部でも一位を獲得します。二位が蒲原有明、三位が与謝野鉄幹、四位が三木露風という顔ぶれからみても、その人気のほどが分かります。

その時期の詩集『柳河風俗詩』から「柳河」、『思ひ出』から「片恋」をお聴きください。

「柳河」は、かっての華やかな水郷の町の幻影を歌います。「片恋」の舞台は、東京墨田区の「曳舟川」のほとり、色町の風景描写にはフランス象徴詩からの影響を受けた、ことばの華麗な美しさを求める詩風が見られます。

1　「柳河」「片恋」演奏　〈詩—1、2〉

〈ナレーション—２〉

詩人として絶頂期を迎えた白秋でしたが、隣に住む松下俊子という人妻と激しい恋に落ち、俊子の夫より当時刑法に定められていた「姦通罪」で訴えられます。弟鐵雄の必死の奔走により事なきを得ますが、「芸術の寵児のスキャンダラスな恋愛事件」として世間の話題となり、白秋は詩人としての地位を一気に失うこととなります。

一時は自殺を考えるほど追い込まれた白秋でしたが、俊子と共に、世間の目から逃れ、三浦半島の

三崎に移り住みます。そこに白秋を頼って柳川から上京した北原家一家も同居したために、経済的に大変を状況に陥ります。そんな中、俊子が肺病を患い、その転地療養と、自身の再生のため、小笠原諸島へ移住するという無謀ともいえる計画を実行します。

東京から1000Kも離れた、かつての無人島での生活は困難を極め、俊子が島から離れた後も、白秋は半年間暮らします。東京から遠く隔てられ白秋を知る人のない「絶海の孤島」で、白秋は身も心も洗われ、再生の道へ進む一筋の光を見出します。

それでは小笠原の思い出から生まれた詩2篇をお送りします。

「追分」、椰子の花咲く南の島。月夜に流れる尺八が奏でる極寒の北海道民謡「江差追分」。その劇的な対比が鮮烈です。

「びいでびいで」。「びいでびいで」は、ムニンディゴという小笠原の木。その花のもとでの出会いと別れ。切ない初恋の思い出。モデルは、白秋が島で出会ったリデアと言う少女かもしれません。

「追分」、「びいでびいで」演奏　〈詩―3、4〉

〈ナレーション―３〉

小笠原から戻った白秋夫婦は、東京に転居した両親始め白秋一家４人と共に暮らします。弟の収入だけに頼る生活は困窮を極め、次第に家族関係も冷えきっていき、妻俊子は家出、離別します。

その二年後に白秋の前に江口章(あや)子が現れます。平塚らいてうの『青鞜』の仕事に携わる知的で快活な女性でした。気心の通じ合った二人は結婚、葛飾の農村での生活が始まります。毎日訪ねてくる子供たちの「無垢」で「純心」な心に動かされた白秋、こうした子供たちの世界を新たな創造の核に詩作を再開します。時に1918年、鈴木三重吉が『赤い鳥』を創刊すると、そこを舞台に数々の童揺詩を発表、童謡詩人として本領発揮していきます。特に全国に伝わるわらべうたの蒐集やイギリスの『マザ－グース』の研究や翻訳に力を尽くし、詩作に生かしていきます。まさに万華鏡のような言葉の魔術師としての詩表現は子供だけではなく大人にも楽しめる深さの作品を生み出しました。

それでは、信長貴富編曲による白秋の童謡をメドレーでお聴きください。

5　「小さないのち」演奏

〈ナレーション―４〉

童謡詩人として再出発を果たした白秋は、小田原に引っ越し、新居の建築をめぐってトラブルが重なる中、章子が雑誌編集者と駆け落ちしてしまいます。落胆する彼を見かねた友人の紹介で、２年後、九州の時計商の娘佐藤菊子と再婚します。翌年には長男誕生。いよいよ童謡詩に力を入れていきます。

その後山田耕筰とのコンビで数々の名曲を生み出し、童謡の域をこえた芸術歌曲として国民に愛されます。

このステ－ジ最後では二人のコンビによる歌曲から三善晃編曲「からたちの花」と「ペチカ」をお送りします。

「からたちの花」は、「からたちのそばで泣いたよ」の詞が印象的でよく知られています。この詩句について耕筰は「からたちのそばで泣いた少年は私だ」と語っています。父親を亡くし、叔父の家に引き取られ、印刷所で働きながら学校に通った耕筰。自伝では「工場で職工に足蹴にされたりすると、私はからたちの垣まで逃げ出し、人に見せたくない涙を根方に濯した」と書いています。この思い出を白秋に語ると、白秋は感激して泣いたといいます。

「ペチカ」の舞台はロシアと思われますが、満州です。大正期、満州への移民が増え、愛唱歌の依頼を受けて二人が満州に出かけて作りました。雪に閉ざされた冬の夜、暖炉の傍らで昔話を語る母と子の情景をうたったもの。当時の満州と言えば、1931 年に満州事変、翌年には日本による傀儡国家の満州国が作られ、5 年後には日本は中国との全面戦争へ突入します。そうした中で、「雪の降る夜は楽しいペチカ」などと歌っていられる状況ではなかったのでしょう。1932 年には『南満州唱歌集』から削除されています。

編曲者三善晃は翌 33 年生まれ。敗戦間際の夏、三善少年は友達と多摩川で水泳中に米軍機の機銃掃射を受けて友を失う体験をします。そんな原体験を心の奥深く持ち続けた三善、この編曲では白秋の詩を当時の満州を巡る歴史的な背景に置き直し、厳しい冬の時代の中で春を待ち望む家族の物語に変換しているように思われてなりません。

それでは最後に「からたちの花」と「ペチカ」をお聴きください。

6　「からたちの花」「ペチカ」演奏　〈詩―5、6〉

話題いろいろ

◆仏教よもやま話

B2. 松田まさのぶ

第２回《高座》

　画像は、松田の生家の仏壇です。

　生家は、浄土真宗の檀家であるため、仏壇は、無駄にでっかいものですが、今はそれではなく、仏壇の前の小さな畳をご覧ください。

　これは、「高座」と呼ばれるものです。そう、落語でよく出てくる高座です。

　鎌倉幕府の御家人を中心に広まったといわれる臨済宗などに比べて、字の読めないのが普通であった浄土真宗の家では、法事に訪れた僧侶は、この高座に座り、仏壇に向かってお経を読んだあと、参列者に説教をする。その説教、小難しい話では聞いてもらえないので、面白おかしく話をするようになった。

　それが、落語の由来とされています。

　上方落語は、「おふみ」や「寿限無」など浄土真宗の影響を受けているものが多く、江戸落語は、「法華長屋」など日蓮宗の影響を受けているものが多いともいわれています。

第３回《観音様》

　団員の皆様の、初詣は、どこが多いのでしょうか。

　熱田神宮？　豊川稲荷？　中には大須観音という人もおられるでしょうか。

　観音様というと、慈母観音など優しい母というかおばあさんのようなイメージがあると思います。

　観音様の正式名称は「観世音菩薩」

　人の世の苦しみを聞き取って救ってくださる方です。

ところで、観音様は、女性なんですか?

実は、仏教の始まった頃の観世音菩薩は、男性と考えられていたようで、チベットの仏教寺院などには、筋骨隆々の男性として描かれているものが多くあります。

日本に伝わった仏教は、ガンダーラからカイバル峠を越して中国へ伝わり、その後日本へも伝わりました。

中国は儒教の影響で、非常に男尊女卑の考えが強かったのですが、仏教は釈迦がバラモンの身分でないことに苦しんで出来た宗教であり、平等意識が強かった。その結果、中国において、観音様は女性として扱われるようになり、現在我々が目にする観音様は、六世紀ごろの中国の女性の衣装を身にまとっておられるそうです。

でも、世の女性たちは、そんなにやさしいのでしょうか？

私は恐妻家なので、にわかには信じられません。

◆ちゅうコン７７を終えて

B1. にしじまちゅうじ（写真撮影　T2. 小野幸義）

2025 年 12 月、「ちゅうコン 77」は年の瀬も押し詰まった 28 日の開催でした。
このコンサート企画案は 77 歳になる誕生月の 7 月実施で考えておりましたが、戦後 80 年の今年は様々な催しがあり、私自身もお芝居（俳優館公演「あとかたの街」）出演の予定が入るなど、何時やったらよいのか彷徨い続け、とうとうこの年末になってしまいました。

70 歳を過ぎてから何故か出演依頼がちょくちょく来るようになりまして、ナレーションだったり歌だったり。

そして今年、初めて合唱団の指揮の依頼が来てしまいました。歌は好きで歌ってきましたが合唱指揮の経験はありません。

高校時代クラス対抗の合唱コンクールのような催しで、クラスの指揮をした事がありましたが、それ以来かも。余談ですが、我が 3 年 B 組は、合唱部のメンバーが多くいた優勝候補の 3 年 H 組を押さえ優勝いたしました！

何でこんな事になってきたのか、戸惑いながらも忙しく日々を過ごしておりました。そしてそんな中でちゅうコン練習が始まり当日に至るのですが、悩ましい問題もまたいろいろと･･･。

56 歳の時、こんにゃく座の本公演オペラ「まげもん―夏の陣―」に、一般人を出演させてくれる企画があり、そのオーディションを受ける事にしました。

2 曲の譜面が送られて来て、それをオーディションで歌えという事でした。どちらか 1 曲でよかったのに勘違いして 2 曲とも 1 週間で覚えました。

頑張れば出来るもんですね。あれから 21 年の歳月を経て、あの時の記憶力は何処へ行ってしまったのか。

何度も歌ってきた歌なのに歌詞が出てこなかったり、稽古すればするほど間違える個所があちこち移動し、一番と二番がごっちゃになりあげく訳が分からなくなってしまったり。

もう止めた方がいいかなと何度思ったことか。

しかし今回孫娘むぎの出演予定もあり、歳はとりたくないとつくづく思う 77 歳の老体に鞭打ち、何とかありのままのちゅうじを見てもらい歌を聴いてもらえばいいんじゃないかな、との心境に辿り着いたのでした。

折角聴きに来て下さったみなさんに、気持ちよく帰っていただけるよう、気を引き締め何とか最後まで歌い切るように、と思ったところです･･･。

ご来場のみなさま、最後まであたたかいお心とそのまなざしに励まされ何とか歌うことが出来ました。まことに、まことにありがとうございました。

そしてこんな私にお付き合い下さったピアニストの天石さん、そしてもう一人のピアニスト中野健一さんとソングをうたう会のみなさん、大変お世話になりました。感謝しきれません。

なぜか一部に、「ちゅうコン 80 待ってるぞ！！」なるお声があるようですが、あと3年、もし元気で命永らえておりましたらば、万が一ひょっとしてということがあるかもしれません。その時はぜひまたご来場いただき、楽しいひと時を過ごすことが出来ますことを願っております。

写真撮影/小野幸義